

“Ever Resemble Janus with a Diverse Face”

ジョン・ダン『イグナチウスの秘密会議』における

公会議主義(1)

“Ever Resemble Janus with a Diverse Face”:
Conciliarism
in John Donne’s *Ignatius His Conclave* (1)

森 ゆかり

Yukari MORI

Abstract John Donne(1572-1631), in his years of the spiritual crisis at Mitcham, penned the satirical tour de force *Conclave Ignati*, first in Latin, followed by his own translation into English, published in 1611 as *Ignatius His Conclave*. This book might be interpreted in the context of King James’ controversy with Cardinal Bellarmine over the Oath of Allegiance, whereby the Protestant Establishment attempted to distinguish between Roman Catholics who were loyal subjects of the Kingdom and those who were not. Donne, in his *Ignatius His Conclave*, however, distrusted both of them, describing them as “Janus with a Diverse Face.” Part One of this essay deals with the latter group of Roman Catholics, including English Jesuit Robert Persons, who refused to take the Oath, saying that the Oath denied the spiritual power of the pope over secular kings. Those Ultramontane Catholics asserted that the pope could coerce or even depose kings with excommunication, because the pope should protect the subjects of an heretical king. Spanish Jesuit Juan de Mariana even defended the right of tyrannicide that could be exercised by any private person. Anglican divines in the Oath controversy, on the other hand, proclaimed the most effective weapons against papal and Jesuit aggressions would be the absolute monarchy.

1. 問題提起

John Donne (1572-1631)が Mitcham 蟄居時代に執筆した *Conclave Ignati* は、Bald によると、1610 年後半に当初ラテン語で執筆され、翌年 1 月 2 日書籍出版組合登録、同年 5 月 18 日には、ダン自らの手による英語版、*Ignatius His Conclave* (以下、『イグナチウスの秘密会議』と記す)が出版登録されている。この執筆年代推定は、同書にフランス国王アンリ 4 世の暗殺 (1610 年 5 月 14 日) と、ガ

リレオ『星界の報告』(1610 年 3 月)への言及が有ることに依拠するものであり、妥当なものと考えられる。1) 当作品は、Bald も指摘するように、1607 年から 1610 年にかけて、ダンが宮廷で求職に何度も失敗し、英国国教会司祭叙階を決意する前に経験した、霊的危機とも言うべき時代に執筆された 2) 問題作である。

舞台は地獄、イエズス会創立者、聖イグナチウスは、地獄の王ルシファーの右の座を狙い、地上でどれだけ地獄の勢力範囲を拡大するのに貢献したかをめぐり、コペルニクス、パラケルスス、マキアベリ、コロンブス等の改革者 (“innovators”) 3)と論争する。イグナチウスの途

方もない野心を見抜いたルシファーは、教皇が、イエズス会を世界宣教に派遣したのと同様、イグナチウスとイエズス会士を月上界に派遣、そこで新しい地獄の建設を提案するものの、かつてルシファーが反逆によって地獄の帝国を手にしたように、4)物語の大団円で、イグナチウスもまた反逆により、教皇を追い出して(廃位して)、ルシファーの右の座につく。もとより地獄の三位一体では、父たるルシファーは、愛によってひとり子イグナチウスを生み、父と子から発出する聖霊は、ローマ教皇として世を支配すると、5)ダンは、物語の初めに予め伏線を張っており、ルシファーの右の座に着くことになるのは、子たるイグナチウスであることを予告しているのだ。

しかしながら、当作品は、背景になったとされる忠誠誓言(the Oath of Allegiance)をめぐる神学論争自体が持つ複雑さと、諷刺の構造がもつ重層性のために、解釈が難しい作品となっている。

『イグナチウスの秘密会議』は、英国国内で、ガイ・フォークスをはじめとする一部の急進的教皇主義者が暴走し、議会出席中の国王、国王一家、両議会議員をもろとも爆破テロで殺害、国家転覆を謀ったとされる火薬陰謀事件 (the Gunpowder Plot) が、1605年11月5日、匿名の投書で未然に発覚したことを受けて、18才以上の英国国民に対し、国王に対する忠誠誓言を義務付けした英国国王ジェームズ1世と枢機卿 Robert Bellarmine(1542-1611)との間の神学論争の文脈で解釈されなければならないとされてきた。6)本論文では、『イグナチウスの秘密会議』に関し、教皇による国王廃位権をめぐる忠誠誓言論争と関連しながらも、これまで、Healy の注解以外殆どの研究が焦点をあててこなかった公会議主義が、解釈上重要な役割を果たす可能性があることを検討したい。

なぜなら、ダンが『イグナチウスの秘密会議』の冒頭、

TO THE TWO TUTELAR ANGELS,
PROTECTORS OF THE POPES CONSISTORY,
AND OF THE COLLEGE OF SORBON

と呼び掛けて、教皇庁と、公会議主義を擁してこれに対立するフランス・ガリカニズムの牙城、ソルボンヌ大学の2つを並べ、"you did never agree, and never meet, but that you did ever abhorre one another, and ever Resemble Janus with a diverse face,"とし、更に"I attempted to bring and joyne you together once in these papers"と述べ、この2つが実際

にはヤヌスの顔であって、ローマ・カトリック教会という、同じ胴体を共有し、"you might beware of an enemy common to you both"と、ヤヌスのふたつの顔に共通の敵対者一すなわち、教皇権から王国を護る神授の絶対王権一が存在すること警告しているからである。7)プロテスタント宗教改革当初からローマ・カトリック教会は、世俗的政治政体の設立が、神に依るものであるとするプロテスタントの王権神授説を異端として退けてきたからだ。8)これまで、『イグナチウスの秘密会議』に関する研究で、ヤヌスの一方の顔である、教皇至上主義については、多くの言及があつたにもかかわらず、もうひとつ別の顔、当時、"School of Sorbonne"と呼ばれていた、9)公会議主義を扱ったものが殆ど無いのは、片手落ちであるといえよう。このように、本論文では、ダンが『イグナチウスの秘密会議』で、教皇庁ばかりでなく、公会議主義を擁するソルボンヌ大学をも、絶対王権の敵と見なして、ひとつに結び付けようとしたのは何故か、ジェームズが一時、自ら公会議召集を発案する際に援用したソルボンヌをはじめとするパリ公会議主義が、一体何故、絶対王権の脅威と成り得るのかを、以下で詳述してみたい。

『イグナチウスの秘密会議』に於ける公会議主義を考察する前に、セクション2では、まず、英国の国家主権を脅かすものとして恐れられていた、教皇による間接的世俗権行使を、まさに体現したとでもいうべき人物、英国人イエズス会士の Robert Persons (1546-1610)と、イエズス会の急進的政治思想を考察した後、セクション3で、教皇による国王廃位権をめぐる忠誠誓言論争の概略を、さらにセクション4で、公会議主義と、皮肉にもその落し子ともいうべきカルヴァン派の急進的政治思想を考察し、最終セクションでは、作品解釈に上記の思想・思潮がどのように反映して、ダンの諷刺が構築されているかを考察したい。

2. パーソンズとイエズス会政治思想

ダンが『イグナチウスの秘密会議』執筆に取りかかる前後の1610年4月15日、ローマで死亡したパーソンズは『イグナチウスの秘密会議』で、「英国人パーソンズは枢機卿に選ばれそうである」と、名指しで諷刺の対象になっているが、10)彼ほど敵の多かった人物も他にあるまい。オックスフォード・ベイリオル学寮のフェロー時

代、不明瞭会計の嫌疑をかけられて学寮を追放された頃に始まり、1575年、後に火薬爆弾事件に連座させられて処刑された Henry Garnet とともにイエズス会に入会するものの、大陸に渡って改宗、カトリック司祭となったベイリオル時代の敵対者は、ことごとく反イエズス会の Appellant 派にまわって英国政府と内通する。また1580年から一年間に及ぶ英国宣教では、ダンの母方のおじにあたり、イエズス会士でありながら、極めて例外的にガリカン主義を擁護していた Jasper Heywood と対立、11)大陸に戻ったパーソンズがローマ、ネーデルランド、スペイン各地で設立に尽力したカトリック司祭養成のための英国学寮では、英国人在俗司祭と対立、イエズス会内でも、寄付金などをめぐってネーデルランド、フランス、スペインの地元管区と対立、更には英国宣教をめぐってベネディクト会とも対立した。何にもまして、英国国家主権を脅かすとして英国プロテスタントに最も恐れられていた、教皇による間接的世俗権行使のため、スペインをはじめとする大陸カトリック列強と謀り、英国侵略計画を何度も実行に移そうと暗躍した急進的人物なのである。12)冥土の土産に手向けたともいえるダンの諷刺の辛辣さには、単なる思想的対立をこえた個人的なものさえない訳には行かない。

実は枢機卿に関する言及に、この諷刺を解く鍵がある。ダンはいエズス会士出身の枢機卿ベラルミーノ、Francisco de Toledo (1532-1596)を例にあげて、高位聖職を求めないというイエズス会の誓願 13)に背き、枢機卿になることは、イエズス会士にとっていわば殉教であり、殉教者に相応しく彼等の「天国」たる地獄にやってくるというのが、14)ダンも更に続けて、イエズス会士で枢機卿就任を断った Diego Laynez や Francisco Borgia については、殉教を恐れたのだとしてその臆病さを非難している。15)実はパーソンズも、英国宣教の最高責任者であった枢機卿 William Allen が1594年に逝去した後、the Duke of Feria 等カトリック有力者から、後任の枢機卿として何度も推挙されているにもかかわらず、16)イエズス会士として誓願を守り、これを断っている。17)当時、多くの人々の目には、偽善的に枢機卿就任を断りつつ、野心的にふるまう人物と映ってしまったようだ。18)ダンの諷刺の論理でいくと、枢機卿就任を断ったパーソンズは、殉教を拒んだ臆病者という訳なのである。

本人の真意とは裏腹に、比喩的な意味ばかりでなく、実際の殉教を恐れた臆病者という評価が、パーソンズの

生涯にはどうしても付きまってしまう。彼の唯一の英国宣教活動は、1580年6月12日にはじまり、19)宣教司祭が英国国内で活動するためのネットワーク作りに奔走、同時期に英国に入国したイエズス会士の Edmund Campion が逮捕され、1581年7月22日、ロンドン塔に収監されると、20)恐らく8月13日から同月21日までの間に密かに英国を出国、フランス経由で大陸に戻っている。21)度重なる拷問に耐えたチャンピオンが、同年12月1日に、タイバーンで殉教しているのにひかえ、ヘイウッドをはじめ英国内からは、パーソンズに対して何度も帰国要請があったにもかかわらず、22)ローマで客死するまでパーソンズが英国の土を踏むことは二度となかったのである。イエズス会第5代総長、Claudio Aquaviva が、教皇とスペイン王室の信頼も厚く、行政手腕に長けていたパーソンズの才能を惜しみ、英国に帰国させなかったためである。23)

チャンピオンの殉教で失敗に帰した英国宣教活動の後、パーソンズは活動方針を180度転換、神学論争と司牧による宣教から、スペインをはじめ大陸カトリック列強の援助の下、英国を軍事支配することで国家全体をローマ・カトリックに改宗させようと、水面下の外交交渉を継続する。当時、英国カトリックの中にさえ、パーソンズが危機にたつカトリック信仰のためにではなく、敵国スペインのスパイに過ぎないのだと考える者がいたほどである。24)

以下、パーソンズの数あるローマ・カトリック護教論争書のなかでも、R. Doleman の匿名で著したとされ、25)エリザベス後のイングランド王位継承権が、スペイン国王フィリペ2世の娘で、ハプスブルグ家の一員であるオーストリアのアルベルト公妃、イザベルにあると主張して、世の悪名高い *A Conference about the Next Succession to the Crowne of England* (1594/5年出版、広く *A Book of Succession* として知られている。) 26)を例に、カトリック列強による英国侵略を根拠付けたパーソンズの政治思想を概観してみたい。

パーソンズは、1570年代のローマで、同時代のイエズス会士で、スコラ学の指導的神学者・哲学者である Francisco de Suarez (1548-1619)の講義を聞いており、27)その政治思想の多くを、スアレスをはじめイエズス会神学・哲学の伝統に負っている。もし彼の政治思想を一言で特徴付けるとしたら、神授の絶対王権否定である。

パーソンズはまず、国王の即位宣誓は、支配者と被支

配者の神聖な契約であり、28)王の職位は神聖であるが、国王自身国家の定めた制定法の条件を満たす限りにおいて、これが神聖であるとした。29)国家はその権利を国王に譲渡せず、国王は、国家の代理に過ぎないため、30)国家は国王の権限に制約を課すことが可能であり、31)議会、協議会は、国王に助言を与えるだけではなく、国王の専制を阻止するために、国家によって設立されたものであるとした。32)国家は、それ自身を保護する権利を放棄していないのであるから、国家は専制君主の即位を阻止できるばかりでなく、合法的に即位したが、専制を行う国王を廃位し、新しい国王を即位させることができると主張した。33)また国王が神の名に於いて統治するからといって、ある特定の君主が、神の承認によって支配していることを保証する訳ではなく、34)国家の安寧を脅かす国王から、国家がその権利を回復する際には、神の承認が保証されるとした。35)しかしながら、パーソンズは、国王の廃位権が国家全体にあり、特定の個人にはこれを認めることをしないが、36)国家が全体として専制君主に抵抗できなければ、個人が代表して防衛することも可能であるとした。37)また、パーソンズは、後述するイエズス会士の Juan de Mariana や、小セクション 4.2 で言及することになるカルヴァン派の急進的政治思想家、George Buchanan と異なり、万人に対して、即位式における契約違反を解釈し、行動する権利があるとは認めていない。38)

更に、英国プロテスタントの神経を最も逆撫でしたのは、国家の頭である国王の疾病を診断するのは、教皇であり、教皇がプロテスタント国王を廃位する可能性を認めたことである。39)

実は、パーソンズの師であるスアレスも、セクション 3 で述べる忠誠誓言論争の際、教皇からの要請を受けて英国国王ジェームズの *Premonition* (1609) を反駁し、*Defensio fidei Catholicae*(1613) を出版しているが、これはダンの『イグナチウスの秘密会議』以後に出たもので、ダンが直接参照した可能性はないにしても、当時のイエズス会政治思想の潮流を理解するのに欠かせない。スアレスによれば、教皇は異端の君主の臣民を保護、解放する権利があり、教皇は間接的世俗権行使によって、世俗君主に対し、1) 異端君主を破門または禁令等、2) 教皇の国王廃位権を通じて、強制権を行使できるとしたが、40)スアレスもパーソンズと同様、個人が一方的に専制君主を殺害することは認めていない。41)

ダンは、『イグナチウスの秘密会議』で、地獄の教会を

守護する 2 本の刀は、教皇による破門と、イエズス会士による国王殺害であるといっているが、42)もう一本の刀については、上記とは別のイエズス会士を探さなければならない。舞台はプロテスタントのユグノーとローマ・カトリックの宗教対立で混迷するフランスである。

1584年アンジュー公の死により、フランス王位次期継承者となったナヴァールのアンリは、ユグノー教徒であったため、国王殺害して、カトリック王政を維持しようとする Jean Boucher, Guillaume Rose 等の論客が現れた。43)ダンが、『イグナチウスの秘密会議』で言及するように、44)1589年8月、Jacques Clement が、フランス国王アンリ 3 世を暗殺したたことにより、ナヴァールのアンリがフランス王アンリ 4 世として即位、1594年12月27日、今度はアンリ 4 世自身も暴漢に襲われることになる。今回アンリ 4 世暗殺を目論んだ Jean Chatel が、一時イエズス会の運営する Clermont College に在籍した経歴があったため、『イグナチウスの秘密会議』でも、言及されているように、45)1595年1月7日、イエズス会はフランスから追放されている。46)このようにフランスで国王暗殺、暗殺未遂が続くなか、スペイン人のイエズス会士、Juan de Mariana(1536-1624)が、*De Rege et Regis institutione* を1599年にトレドで出版、王権は神授でなく、国王は国民から委託された権限をもつのみであるから、必要な場合には、暴力を使ってでも国民によって廃位させることができると主張し、極端な場合には、個人の判断でも国王暗殺を認めたのである。47)彼については、ダンも『イグナチウスの秘密会議』で直接言及しているが、48)このマリアナの見解は当然のことながら、イエズス会のベラルミーノや、当時イエズス会の総長であったアクアヴィーヴァによっても弾劾されているにもかかわらず、49)イエズス会は、国王殺害さえ正当化するという誤解が、長く人々の意識に定着し、50)1610年5月14日、ついにアンリ 4 世が Francois Ravillac によって暗殺されると、51)カトリック同盟以来、イエズス会が国王暗殺の黒幕であるとの嫌疑をさらに深刻化させてしまうのである。52)

教皇または国民による国王廃位を認めるパーソンズ、個人による国王暗殺を認めるマリアナ等、イエズス会の急進的な政治理論を背景に、プロテスタント英国国民が最もおそれていた事件が、後にモンソーグール書簡と呼ばれることになる、1通の匿名の手紙で発覚した。1605年11月5日の火薬爆弾事件である。

3. 忠誠誓言論争

火薬陰謀事件を受けて、ロンドン主教 Richard Bancroft は、英国カトリック勢力のうち、イエズス会の政治活動と一線を引いて、英国王室に忠誠を誓い、絶対王権を主張していたアペラント派 (53) の在俗司祭と水面下で接触、教皇による国王廃位権を主張するイエズス会士をはじめ、教皇主義急進派を、忠誠誓言によって排除するための草稿を作成した。忠誠誓言は、要約すれば、以下7点の宣誓を要求し、(54)アペラント派をはじめ穏健なガリカン主義カトリックが、英国国王に政治的忠誠を誓いつつも、カトリック全体の教義を否定しない形で、教皇による国王廃位権のみを放棄させ、宗教的寛容への道を開こうとしたのである。(55)

- (ア) ジェームズ王は英国の合法的な国王である
- (イ) ローマ教皇は、国王を廃位し、王国や領土を処分し、または外国君主に英国を侵略する許可を与え、国王の臣下に忠誠や服従から解放する権威も権利も持たない
- (ウ) 教皇とその後継者による破門宣言や、王位剥奪、服従免除にもかかわらず、宣誓者は、国王に対して真の忠誠を抱き、全ての陰謀から国王を守る
- (エ) 宣誓者は、自らが知ったり聞いたりした国王に対する全ての反逆や反逆の陰謀を知らせる
- (オ) 教皇によって破門、王位剥奪された国王は、廃位されたり、臣下によって殺害されてもよいとする教義を、忌わしくかつ異端であるとして、嫌悪し放棄する。
- (カ) ローマ教皇及びいかなる者も、この宣誓を免除する権限はない
- (キ) この誓言は宣誓者に対し合法的に執行された

こうして、1606年5月には、宣誓者が、上記7点を明白で通常の意味において理解し、宣誓を曖昧表現の使用、意中回避、秘密保留なしに宣誓することを求められたのである。『イグナチウスの秘密会議』で、教皇、イグナチウスの equivocal な魂から、長く隠されてきたバベルの塔が蘇ると、(56)言っているのは、パーソンズやガーネ

ットが、状況次第で equivocation 使用を認めたことにより、英国カトリック教徒が宣誓をする際、曖昧表現、意中回避や秘密留保等 equivocation の手段を使い、表に表れた言語表現だけでは宣誓者の真意が判断できなくなってしまうと誤解された背景がある。(57)

こうした動きを受けて、教皇パウロ5世は、1606年9月22日、英国カトリックに対し、英国国教会の礼拝に出席したり、忠誠誓言を行うことを禁止する旨の教皇書簡を出したが、(58)当時英国カトリックの最高責任者であった archpriest の George Blackwell は、この教皇書簡を握り潰し、英国国内で回覧させなかった。

英国当局は、こうしたアペラント派ブラックウェルの努力にもかかわらず、1607年6月24日、彼を逮捕、ロンドン主教バンククロフトが彼を尋問することになる。ブラックウェルは収監されたゲートハウス監獄から、英国カトリック司祭宛書簡を通じ、教皇がジェームズを破門するのは非合法であり、ブラックウェル自らに倣って忠誠誓言を宣誓するよう勧告した。(59)しかし同年8月23日、パウロ5世は、再度英国カトリックに忠誠誓言の宣誓を禁止、9月28日、枢機卿ベラルミーノもブラックウェル宛に譴責書簡を出している。11月13日付けのブラックウェル返書は、教皇が国王廃位の世俗権を持つことを否定、(60)教皇命令を無視したブラックウェルは、1608年1月22日、archpriest の地位を剥奪されたのだが、火薬陰謀事件の後、反カトリック立法による経済的・社会的迫害激化を避けるために、国内の多くのカトリック教徒が忠誠誓言を宣誓したと言われている。(61)

こうした一連の事件を踏まえ、ジェームズは、*Triplici nodo, triplex cuneus: or, An Apologie for the Oath of Allegiance* を1607年に出版、この中で、ジェームズは、エリザベス時代の the Oath of Supremacy と異なり、忠誠誓言は、教皇の霊的権威、聖ペトロの首位性自体を否定するものではないと自らの立場を弁護した。(62)教皇パウロ5世は、ジェームズの *Triplici* 反論を枢機卿ベラルミーノに要請、Matteo Torti の匿名で *Responsio* (1608年) を出版する。(63)

Responsio の中でベラルミーノは、1) 教皇の霊的権威は神から直接授与されるが、国王の世俗権は民衆を通じて神から間接的に授与されたものであること、2) 国家は教会に従属し、国王は戴冠の際に、教会の守護者たることを宣誓するため、国王が教会に対する義務を怠ったり、教会の安寧を脅かす場合に、教皇は国王に対し間接

的世俗権を行使でき、教皇は国王を廃位することが可能であるとされた。前セクションで述べたパーソンズと基本的な見解は同じである。64)

ベラルミーノの *Responsio* には、英国国教会、チチェスター主教の Lancelot Andrewes が、*Tortura Torti*(1609 年) を、ジェームズの *An Apologie* には、パーソンズが、*The Judgment of a Catholicic English-man*(1608 年) を出版して反論している。パーソンズの著作に対しては、さらに英国国教会のリンカン主教 William Barlow が *An Answer to a Catholicic English-man* (1609 年) で反駁している。65)最後の著作は、これを手にしたダンが、友人 Goodyer に宛てて、"full of falsifications in words, and in sense, and of falshoods in matter of fact, and of inconsequent and unscholarlike arguings"とコメントして、*Pseudo-Martyr* (『偽殉教者』1610 年) 執筆の直接の契機となったものである。66)

また、上記以外にも、ダンのミッチャム時代に協力関係があったとされるグロースター主教座聖堂参事会長 Thomas Morton は、忠誠誓言論争に関して以下の著作を出版している。67)

- An Exact Discoverie of Romish Doctrine in the Case of Conspiracie and Rebellion* (1605)
Apologia Catholica, Pars I (1605)
Apologia Catholica, Pars II (1606)
A Full Satisfaction Concerning a Double Romish Iniquitie (1606)
A Preamble unto an Incounter with P.R. Concerning the Romish Doctrine of Rebellion and Equivocation (1608)
A Direct Answer onto ... T. Higgons (1609)
A Catholicic Appeale (1609)
The Encounter against M. Parsons by a Review of His Last Sober Reckoning (1609)

このモートンと論争を展開したのもパーソンズであり、火薬爆弾事件の際、事件に関係したケイツビィが告解の場で漏らした反逆計画を、カトリック教会法が定める告解に関する守秘義務のために、英国当局に通報しなかったという反逆隠匿の罪で、68) 1606 年に処刑された同僚の英国人イエズス会士ガーネットを擁護するとともに、英国国王の霊的至上権を認め、教皇権を否定することに

なる忠誠誓言の宣誓は許されないと、忠誠誓言拒否をめぐるカトリック側の見解を、以下の著作でも展開している。

- A Discourse against taking the oath in England* (1606)
An Answer to the Fifth Part of the Reportes of Sir Edward Coke (1606)
A Treatise Tending to Mitigation towardes Catholicic-subjects in England (1607)
A Quiet and Sober Reckoning with M. Thomas Morton (1609)

実は、パーソンズが、1600 年から 1610 年にかけて執筆した著作は、火薬爆弾事件と忠誠誓言論争を受けて執筆した上記著作以外にも、英国カトリック、特に、archpriest 任命や、忠誠誓言を擁護するアペラント派との論争書が多数存在し、パーソンズはまさに、英国国教会とカトリック・アペラント派の両面攻撃に対峙していたのである。69)

さて、以上が忠誠誓言論争の経緯だが、Flynn は、『イグナチウスの秘密会議』の欄外註に挙げられている著作の殆ど全てがカトリックの著作であることを指摘する。プロテスタントの著作では唯一、ケプラーの *Somnium* が挙げられているが、70)これは、忠誠誓言論争とは全く関係がなく、ダンが諷刺を操る離れ業の道具として使っているにすぎない。仮に『イグナチウスの秘密会議』の主題が忠誠誓言論争であるならば、プロテスタント英国国教会側の著作が、国王ジェームズをはじめ、アンドルーズ、バーロウ、モートンと、ただの一点として挙げられていないのは奇妙な話だ。もっとも、『イグナチウスの秘密会議』は、イエズス会士をはじめとする、ローマ・カトリック教皇主義急進派を主に諷刺するものであるのだから、英国国教会側の著作には言及しなかったとしても不思議ではないのだが。

もう少し、『イグナチウスの秘密会議』の欄外註を詳しく分析してみよう。Flynn は、ダンが『イグナチウスの秘密会議』を執筆する際に使用した蔵書のうち、欄外註に挙げているものの殆どが、カトリックの論争神学、歴史、聖人伝等、執筆当時最新のもので、37 冊が 1600 年以降のもの、このうち 18 冊が 1609 年もしくは 1610 年の出版であると言う。必ずしも経済的に恵まれていなかったミ

ツチャム時代に、ダンは、当時最新のカトリック著作を何らかの形で、手にする機会があったわけである。71)しかし、ここで Flynn が指摘を忘れてるのは、これらが全て「大陸」カトリックの手による著作である点だ。『イグナチウスの秘密会議』の欄外註に、火薬陰謀事件の記憶がさめやらない当時の英国で、ダンが、当然槍玉に揚げて辛辣に諷刺してよい、—もっと適切に表現するとしたら、当然諷刺するべき—忠誠誓言論争の英国カトリック側の著作、特に火薬陰謀事件の思想的根拠になったともいうべき、教皇主義急先鋒、英国イエズス会士パーソンズの著作がひとつも挙がっていない点については、首をかしげざるを得ない。前述のようにパーソンズは、ジェームズの即位前、スペインをはじめとするカトリック列強と謀り、何度も英国侵略を計画していたことは、英国プロテスタントにとって周知の事実であり、反カトリック感情が高まる度に、彼は常に憎悪の対象となっていたのである。パーソンズ自身は、火薬爆弾事件を厳しく批判していたにもかかわらず、72)事件後、カトリックのうちでも、最も激しい批判に晒されていたのだ。73)

ダンがこれらパーソンズの著作を知らなかった訳では決してない。上記に挙げたパーソンズの著作は、匿名で発表した Doleman のものを含めて、その殆ど全てが、『イグナチウスの秘密会議』の直前に執筆された『偽殉教者』で引用されているからである。74)学術的の神学論争に嫌悪感を持っていたダンが、75)神学論争自体のパロディーのために、『イグナチウスの秘密会議』で、意図的に肝要な文献を欄外註に挙げず、思う存分、その論旨を歪曲して風刺したためであると同時に、『イグナチウスの秘密会議』は、国内カトリック教徒に対し、忠誠誓言を宣誓しても、カトリック教義自体を否定する訳ではないと主張した『偽殉教者』とは異なる執筆目的を持っていた可能性がある。Flynn もまた、ダンがこの本をジェームズや英国国教会論争家のためというよりは、別の聴衆を想定して執筆したとしている。76)

『イグナチウスの秘密会議』が、前作『偽殉教者』とは異なり、まずラテン語で執筆されたことも考え合わせると、ダンが『イグナチウスの秘密会議』で想定していた読者が、当初から、英国国内に限定されたものではなく、大陸の読者向けに意図されており、77)英国国内の忠誠誓言論争の諷刺というよりは、もう少し広い汎ヨーロッパ的視点で、教皇主義と、次セクションで詳述することになる、公会議主義を擁すガリカン主義という、ふた

つの顔を持ったヤヌス、すなわちローマ・カトリック教会全体が、ダンが理想とする絶対主義王権の存亡を脅かす悪魔的存在であるとして位置付けようとしたものと考えるのが妥当ではないだろうか。

セクション4では、“School of Sorbonne”と当時呼ばれた公会議主義78)の起源と、ジェームズをはじめ、スコットランド・イングランド両国での公会議主義の受容、また、公会議主義の思想的副産物ともいえるべき、John Knox (1505-1572)、George Buchanan (1506-1582)、Christopher Goodman (1520-1603)等、ダンが絶対王権の敵として、『イグナチウスの秘密会議』において名指しで批判する79)カルヴァン派急進主義政治思想家3人についても言及する。

(2)に続く

註

- 1) Healy, xi.
- 2) Bald, 235.
- 3) *Ignatius His Conclave*, 9.
- 4) *Ignatius His Conclave*, 81.
- 5) *Ignatius His Conclave*, 27.
- 6) Flynn, “Donne’s *Ignatius His Conclave*,” 176.
- 7) *Ignatius His Conclave*, 5. ヤヌスの顔について、全く別の解釈をしているのは、吉田、168.
- 8) Skinner, 154.
- 9) Oakley, 153.
- 10) *Ignatius His Conclave*, 83.
- 11) Flynn, *John Donne*, 101-102, 137, 151-152.
- 12) 生涯については、Edwards を参照。
- 13) *Norms*, Part V, 139.
- 14) *Ignatius His Conclave*, 45.
- 15) *Ignatius His Conclave*, 45, 47.
- 16) Edwards, 176, 189.
- 17) Edwards, 177, 189.
- 18) Edwards, 177.
- 19) Edwards, 30.
- 20) Edwards, 51. キャンピオンとパーソンズの英国宣教については、Reynolds を参照。
- 21) Edwards, 54.
- 22) Edwards, 59.
- 23) Edwards, 61, 105.

- 24) Edwards, 144.
- 25) Hicks はパーソンズの単著ではないとする。
- 26) Allison and Rogers 271.
- 27) Carrafiello, 51.
- 28) Carrafiello, 36-37.
- 29) Carrafiello, 36.
- 30) Carrafiello, 39, 52.
- 31) Carrafiello, 37.
- 32) Carrafiello, 37.
- 33) Carrafiello, 40-41.
- 34) Carrafiello, 35.
- 35) Carrafiello, 41.
- 36) Carrafiello, 41.
- 37) Carrafiello, 42.
- 38) Carrafiello, 41, 55.
- 39) Carrafiello, 40.
- 40) Skinner, 180.
- 41) Carrafiello, 53.
- 42) *Ignatius His Conclave*, 61.
- 43) Skinner, 345.
- 44) *Ignatius His Conclave*, 77.
- 45) *Ignatius His Conclave*, 83, 98-99.
- 46) Edwards, 185.
- 47) Healy, 129. Skinner, 346. Carrafiello, 54.
- 48) *Ignatius His Conclave*, 51.
- 49) Healy, 129.
- 50) *Ignatius His Conclave*, 77.
- 51) *Ignatius His Conclave*, 77.
- 52) Oakley, 148.
- 53) Carrafiello, 18.
- 54) Patterson, 79-80. Kenyon, 170-171. 高橋(1989), 77-79.
- 55) Milton, 252. Patterson, 80-81, 92.
- 56) *Ignatius His Conclave*, 27.
- 57) Carrafiello, 136-142.
- 58) Patterson, 81.
- 59) Patterson, 82.
- 60) Patterson, 83.
- 61) Patterson, 84.
- 62) Patterson, 84-85.
- 63) Patterson, 86.
- 64) Patterson, 106-107.
- 65) Patterson, 88.
- 66) Oliver, 172-173. Bald, 217.
- 67) Oliver, 42. Healy, 168.
- 68) フレイザー, 313.
- 69) Carrafiello, 88.
- 70) この *Somnium* は、当時ケプラーがまだ執筆中で、ケプラーの生前は未出版だったものである。Flynn, “*Donne’s Ignatius His Conclave*,” 170 参照。
- 71) Flynn, “*Donne’s Ignatius His Conclave*,” 170-171.
- 72) Edwards, 327.
- 73) Carrafiello, 19.
- 74) *Pseudo-Martyr*, 9, 11, 160, 161 等を参照。
- 75) Oliver, 35.
- 76) Flynn, “*Donne’s Ignatius His Conclave*,” 176.但し Flynn は、作品中登場するイグナチウスを初代ソールズベリィ伯爵、ロバート・セシルであると主張し、ダン は、『イグナチウスの秘密会議』を、ソールズベリィの政敵で、火薬爆弾事件への関与が疑われ、ロンドン塔に 15 年もの間収監されていた、カトリック教徒、第 9 代ノーサンバランド伯爵ヘンリー・パーシィ宛に執筆したとする。
- 77) この点については、Cary, 20 も同様の指摘をする。
- 78) Oakley, 153.
- 79) *Ignatius His Conclave*, 77.

引用文献は(2)にまとめて掲載する

(平成16年3月19日受理)